

県内のカシノナガキクイムシの発生状況 〜平成30年に得られたスカートトラップ調査の結果〜

1 はじめに

ブナ科樹木萎凋病(通称ナラ枯れ)は、媒介昆虫の「カシノナガキクイムシ」(写真1)(以下、「カシナガ」)が樹体内に穿入し、病原菌の「ナラ菌(通称)」を持ち込むことによって、ミズナラ、コナラ、クリなどブナ科樹木が枯れる病気です。

ナラ枯れの防除方法はカシナガの駆除を行う伐倒くん蒸や破碎処理など様々な処理があります。しかし、これらの処理はカシナガが枯れ木から脱出する時期より前に完了させなければ、確実な効果が得られません。そのためカシナガが枯れ木から



写真1 カシノナガキクイムシ

脱出する時期を把握することが必要です。

県内では、平成24年から28年にかけて、カシナガ成虫の発生開始、発生ピーク、発生終了の時期の把握を目的とした発生調査が行われていました。しかし、当時は県内の被害が現在ほど拡大していなかったため、調査は、年に1地点ずつ実施されてきました。近年、被害が内陸南部や沿岸部を中心に拡大し、被害範囲が広がったことにより、県内でも地域によってカシナガの発生時期やピークが異なることが考えられます。

そこで、カシナガの発生状況を確認するため、平成30年に県内5地点においてカシナガの発生調査を行ったので、結果を紹介します。

2 調査

(1) 調査地

- ① 宮古市重茂鵜磯、② 大槌町吉里吉里、③ 大船渡市三陸町吉浜千歳、④ 陸前高田市竹駒町、⑤ 一関



図1 調査位置

(2) 方法

市萩荘平場に設定しました(図1)。平成29年に枯死した被害木にスカートトラップ(写真2)を各調査地5基ずつ設置しました。

スカートトラップは黒の遮光シートで出来ており、1点を切り抜いてペットボトルで出来た捕虫部(写真3)を取り付けています。カシナガは木の中で繁殖し、成虫が順次木の外へ脱出します。脱出した成虫は明るい方向へ向かう性質があるため、被害木をスカートトラップで覆うと、カシナガは唯一明るい捕虫部の穴に集まり、捕



写真3 トラップの捕虫部



写真2 スカートトラップ 木1本につき1基設置する

表 各トラップの発生状況

調査地	発生開始	発生終了	発生頭数(頭/基)
①宮古	6/28~7/2	11/5~11/8	1,048~ 6,589
②大槌	(6/26~6/28)	11/5~11/9	2,197~15,490
③大船渡	6/26~6/29	11/9~11/16	424~ 3,250
④陸前高田	6/28~7/2	11/2~11/9	99~ 2,135
⑤一関	6/22~6/25	10/5~10/9	48~ 1,097

(注1) 時期に幅があるのは、捕虫部の設置から回収までの期間に、発生が確認できた場合を発生開始、発生が無くなった期間を発生終了としているため。
 (注2) ②大槌は初回の回収でカシナガが捕獲され、発生開始時期が特定できなかったことから()としている。

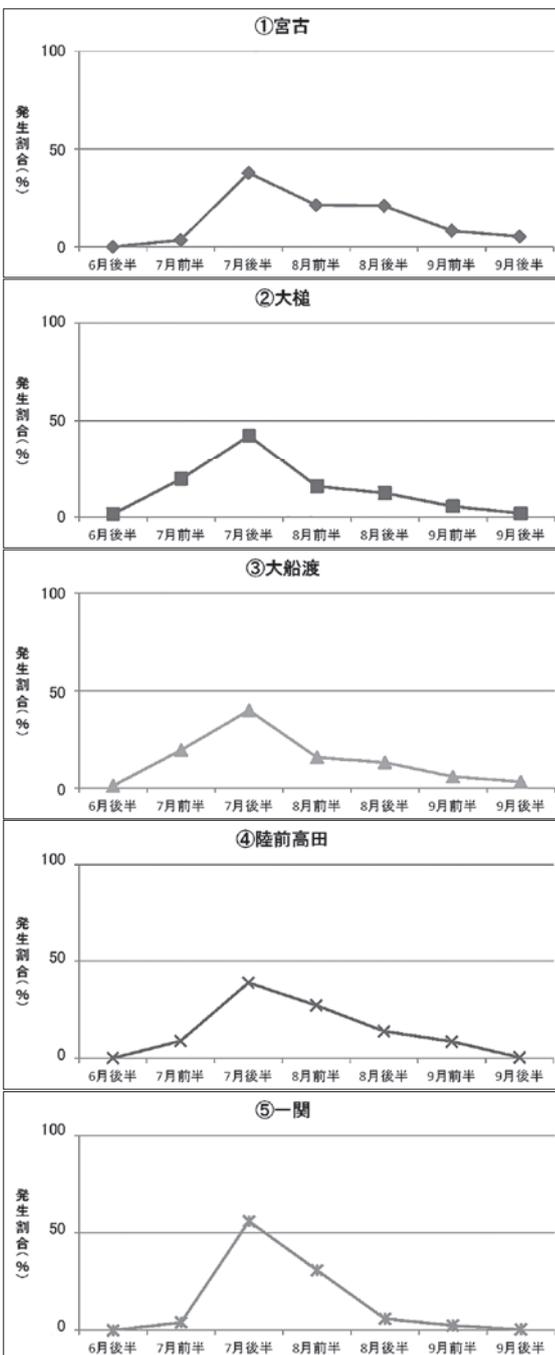


図2 時期別のカシナガ発生割合

3 調査結果

① 発生開始
 県内5地点の調査地のうち、発生時期が最も早かったのは⑤一関で、6月22~25日でした(表)。他の調査地も7月2日までは発生が見られるようになりました。なお、②大槌は初回の回収でカシナガが捕獲されたため、発生開始

4 考察

今回の調査では、発生開始時期は①~④の調査地では11月上旬~中旬に発生が終了しました(表)。一方、⑤一関では10月上旬と、他の調査地よりも1か月ほど早く発生が終了しました。

他の地点より⑤一関がやや早く、発生ピークは各地点でほぼ同時期でした。発生終了は⑤一関がやや早く、他の地点では同時期でした。

今回の調査では⑤一関の発生開始が早く、終了も早かったことから、発生状況に地域差があることが示唆されます。一方で、⑤一関では調査木からの発生頭数が少ないため、発生時期が短くなった可能性があります。また、過去の調査では一関でも発生が11月まで続いたことが報告されています。これらのことから、今回の調査では、⑤一関の発生状況に地域差があると結論付けることは出来ませんでした。

5 おわりに

結果から、各調査地とも6月下旬には発生が始まり、7月後半にピークを迎え、11月まで発生が続くことが示されました。今回、発生時期やピークに大きな違いは見られませんが、発生状況は気象等の様々な要因で変化するとされます。発生状況の把握には引き続き調査を行う必要があります。

林業技術センター

研究部 皆川 拓

019 (697) 1536